大江用水

大江用水の名前は、長保三年（１００１年）に尾張国国司であった大江匡衡が築いたことによる。なお、匡衡の妻は平安時代の歌人として名高い赤染衛門である。

浅井町の大野杁先あたりから木曽川の水を引いていたが、現在は江南市宮田町で宮田用水から取水している。その宮田用水も今では南派川からではなく、木津用水とともに犬山の木曽川頭首工から取水している。

宮田町宮田から西に流れ浅井町尾関で奥村用水と別れ南下して、西浅井の変電所西で江南団地方向から流れてくる日光川と合流し、丹羽町内で時之島排水路と合流し（この先で日光川は再び分かれ佐千原方向へ進む）、国道２２号下を潜って下沼町に入った後一宮市街、稲沢市を貫流して、あま市で蟹江川に合流する。

現在の浅井町より名岐バイパスの辺りにかけては両脇の田畑より水位が高いために、その築堤と保守は難渋を極めたと古老から言い伝えられている。丹羽地内には大塚という古墳があったが、築堤のために土が採取され古墳の規模が小さくなってしまった。

昭和三十二年に丹羽宮浦地内の大江川堤防から撮った写真には、金華山、西浅井の水車小屋、一本橋と呼んでいた木橋などが写っている。一本橋は板が三枚並んだだけの幅９０センチほどの橋で、すれ違うのも危ない状態であった。田畑へ農作業に行き来するための橋であり、戦国時代には一朝事あればすぐに取り壊して通行できないようにとの戦略であり勝手に補強などできなかったらしい。

江戸時代から明治・大正・昭和初期までは西浅井や東小島には水車小屋があり、大江川の豊富な水を利用して穀物の脱穀や精米がおこなわれていた。現在、一宮市大字丹羽字車屋という地名が残っている。

昭和四十年代に、西浅井との境に中部電力北一宮変電所が池を埋め立てて建設された。昭和五十七年には、日光川の古川で低湿地のため毎年冠水していた田圃を、岐阜県御嵩町から運んできた山土で埋め立てて愛知県立一宮東養護学校が設立された。

五十年前には一本橋（現在は大塚橋）を渡ると田圃の中でコンコンと泉が湧いていた辺りが井端という小字名になっている。そこに昭和四十七年に出来た団地の通称は「井端団地」であるが、バス停の名前は「丹羽団地」となっている。

一本橋の西側は遮るものが無く、佐千原方面の機屋のノコギリ屋根や艶金興業の大きな煙突が遠望でき、朝夕の伊吹山の景観は雄大であった。この佐千原はかって妙興寺の寺領であったそうで、享徳元年（１４５２年）の妙興寺古文書には、木曽から伐採された京都南禅寺の建築用材が、洪水のために八百津町の錦織綱場（昔ここで筏を組んだ）から流出して木曽川の三之枝（日光川）に流れ込み、それを佐千原村の住民が総出で拾い集めたが、南禅寺側が引き渡しを求めたと記されている。

丹羽の大江川で堤防崩壊が危ぶまれるところは、西浅井の水車小屋の北側であると古老からいわれていた。木曽川の三之枝であった日光川は、江南市から浅井の温故井池（河跡湖）を過ぎ大江川を横切って佐千原へと流れる。往時の川筋が偲ばれる。

森　栄（ひでし）著「大江川を通して知る先人の遺産」より